

《翻訳》マルティン・ルター「人は死から逃れることができるのかどうかについて」（一五二七年）WA  
23, 323-386

著者	多田 哲
雑誌名	ルター研究
巻	17
ページ	5-33
発行年	2021-04-15
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1075/00000660/">http://id.nii.ac.jp/1075/00000660/</a>



マルティン・ルター「人は死から逃れることが

できるのかどうかについて」(一五二七年) WA 23, 323-386

訳・解題 多田 哲

一 書簡本文

敬愛するヴロツワフの牧師ヨーハン・ヘス博士、  
ならびにキリストの福音に仕える同僚たちへ。

マルティン・ルター

私たちの父なる神と主イエス・キリストからの恵みと平和とがありますように。

あなたがたが以前にヴィッテンベルクへ送ってきた質問ですが、すなわち、死が迫りくるに際してそこから逃れるのはキリスト者として相応しいかどうかということですが、私たちがこの質問を受け取ってから随分と時間が経ちました。そろそろ、これに答えるべきでしょう。しかし、全能の神が私にそれは大変な試練を与えて、読むことも書くこともままならなかったのです。そこで私はこうも考えました。憐れみ深い父なる神が、キリストによるあらゆる理解と真理とをあなたがたに豊かに賜り、あなたがたは自らの霊と恵みとによって、私たちの助言なしに、自分たちでこの大きな問題に取り組んで解決できるのではないかと。

しかし、あなたがたが未だ答えを見出せず、聖パウロが繰り返し教えているように、心と思いを一つにするために私たちの意見を聞かせてほしいと熱心に求めているので、私たちは神が教えてくださって理解させてくださっている限りのことを私たちの意見として伝えます。私たちは謙遜の思いをもって、あなたがたと全ての信仰深いキリスト者が私たちの意見を評価して重んじてくれるように望みます。また、私の周囲や他のところでも、この死の病についての話をよく耳にしますので、おそらく他のところでもこのような私たちの指針が求められ、必要とされているでしょうから、私たちがこれを印刷して送ることにしました。

ある人たちは、とにかく迫りくる死から逃げることはできないし、逃げるべきでもないと言張ります。なぜなら、死は私たちの罪に対して与えられた神の罰なので、正しく堅い信仰によってその罰に耐え、受けるべ

きだということ。そうでなければ、不義であり神への不信仰ということになります。しかし、他の人たちは、自分の職務から離れることができないのでなければ、逃げて良いと言います。

私は前者が述べる良い意見を非難することはできません。というのも、良いというのは、すなわち、強い信仰を強調しているからです。この人たちは、すべてのキリスト者が強く堅い信仰を持つようにと望んでいるのですから、称賛すべきでしょう。死を受け入れる信仰は、ほとんどすべての聖徒たちを恐怖させ、今もそうさせていますが、それは乳を飲ませる信仰以上のものなのです。私たちがこれから述べるように、純粋な心で死をもつとせず神に従い、神を試みることなく委ねる人を、称賛しない人がいるでしょうか。

しかし、そのような強い信仰のキリスト者は少数で、多くの者たちは弱いのですから、すべての人に同じような重荷を負わせることはできません。マルコによる福音書の最後に記されているように、信仰の強い者は毒を飲んでも傷つくことはありませんが、信仰の弱い者は死に至るのです。ペトロは、信仰が強い間は湖上を歩くことができましたが、疑って信仰が弱くなった途端、沈んで溺れそうになりました。強い者が弱い者と一緒に歩く時は、しっかりと弱い者に気を配り、自分の強さに任せて走っていくようなことがあってはいけません。それで弱い者が死に至るようなことがあってはなりません。聖パウロがローマの信徒への手紙一五章やコリントの信徒への手紙一―二章で教えているように、キリストは弱い部分を投げ捨てる方ではないのです。

簡潔に要約すれば、死ぬことと死から逃げることと二様の方法があるのです。第一に、神の言葉のために囚われている人が死を免れるために神の言葉を否定して信仰を捨てるならば、それは神の言葉と掟とに反することです。この場合、いかなる人にとっても、逃げずに死を受け入れることは、明らかにキリストの掟であり命令で

す。キリストはマタイによる福音書一〇章で「人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも天の父の前で、その人を知らないと言う」と語っていますし、また、ルカによる福音書一二章でも「体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない」と語っています。

同じように、説教者や牧師といった職務にある人たちも、迫りくる死の中に立って留まる責任があります。というのも、そこにはキリストの明確な命令があるからです。「良い羊飼いは羊のために命を捨てる。羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる」(ヨハネによる福音書一〇章一〇、一一節)と書かれている通りです。死に際して、人は何にもまして靈的職務を必要としているのです。神の言葉とサクラメントとによって良心が強められ、慰められ、信仰のうちに死に勝利するためです。ただし、既に多くの説教者が居て、このような危険の中に全員が残る必要が無いとお互いに合意するならば、何人が退去することを私は罪だと考えません。なぜなら、そこには十分に靈的職務が備えられているはずですし、必要であれば、そこに留まる意志があるからです。聖アタナシウスは自分の命を守るために教会から離れたことが、なおそこには職務を遂行する者たちが多く居たからです。同じように、ダマスコの兄弟たちは聖パウロを町の城壁越しに籠を使って逃したと使徒言行録九章に記されています。また、一九章には弟子たちが、聖パウロが野外劇場に入って危険に遭わないようにしたことが記されています。なぜなら、あえてそこで危険に遭う必要がなかったからです。

さらにまた、市長や判事などのような世俗的職務を担っている人たちも留まる責任があります。というのも、町や領邦を治め、守り、支えるようにと神の言葉は世俗的權威をその場に設定しているからです。聖パウロが

ローマの信徒への手紙一三章で「権威者は神に仕える者であり、云々」と述べている通りです。もしも、共同体全体を守り、統治するように命じられている者が、たとえば、火事、殺人、反乱、その他の悪魔がもたらす災難などのあらゆる危機に際して、それを放棄して無政府状態に陥らせるならば、それは大きな罪です。なぜなら、そこには秩序がなくなるからです。また、聖パウロは言っています。「家族の世話をしない者がいれば、その者は信仰を捨てたことになり、信者でない人にも劣っています」(テモテへの手紙一五章八節)。しかし、とても気弱になってしまつて逃げ出そうとするならば、上で述べたように、しっかりと共同体の面倒を見て管理するために、あなたの町に十分な責任者がいることを確かめてからでないといけません。このことを熱心に要請し、確認した上で避難しなさい。

今ここで二つの職務について述べたことは、他の全ての人も心得ておくべきことです。奉仕と義務とは互いの合意に結びついています。使用人は自分の主人の許可なく、女中は自分の女主人の許可なく、逃げ出してはいけなしいし、同様に、主人は自分の使用人に対して、女主人は自分の女中に対して、他に十分に生き延びる方法を提供しない限り、その人たちを見捨ててはいけません。というのも、これらは全て神の命令なのです。使用人や女中は従順であるべきで、主人や女主人はその人たちを世話すべきです。同様に、親は子どもに仕えて助けるべきで、子どもも親に仕えて助けるべきです。これも神の命令による義務です。共同体に賃金で雇われている人々、たとえば、公設医や官吏、傭兵、その他の挙げ得る限りの職業の人々も、自分の部署に相応しいと上役が認めた人たちを十分に配置することなしに逃げ出すことはできません。

さらに、親がない場合でも、被後見人に対しては後見人、最も近い親類や親しい人たちが責任を負ってい

ます。その人が病気になったら代わりに看病してくれる人を何とかして見つける義務があります。これは確かなことです。他に病人を看病し、世話をする人がいない限り、誰も隣人から逃げ出すことはできないのです。こういう場合には、まず何よりも「私が病気するとき、訪ねてくれなかった」〔マタイによる福音書二五章四三節〕等々のキリストの言葉を、畏れをもって聴くべきです。こういうキリストの言葉によって、私たちは皆、互いに結び合わされています。ですから、困難の中にある隣人を誰も見捨てるべきではありません。そうではなくて、隣人に寄り添い、自分がしてもらいたいと思うことを隣人に行って助ける義務が私たちにはあります。

しかし、その必要がない場合、それが義務にせよ、任意にせよ、あるいは、信仰の弱い人たちのために備えられたにせよ、留まるのも逃げ出すのも自由です。また、病人自身が留まることを望まなかったり、拒んだりする場合も、同様に自由です。信仰が強められれば、神の名によって留まることができるでしょう。もちろん、そのことで罪になることはありません。反対に、弱く恐怖にある人は、隣人に対する義務を疎かにせず、そのために十分に気にかけて備えているならば、神の名によって逃げ出すことができるでしょう。というのも、死から逃げ自分の命を救おうとする本性は神から与えられたものであって、禁じられてはいません。そうしたからといって、神に敵対するわけでも、隣人に敵対するわけでもありません。聖パウロがエフェソの信徒への手紙四章で「わが身を憎んだ者は一人もおらず、かえって、わが身を養い、いたわるものです」〔五章二九節〕と書いている通りです。実際、人は自分自身の体と命とを守り、だらしなく放置してはいけないと命じられています。聖パウロはコリントの信徒への手紙一―二章で「神は私たちの四肢を体の各部分が互いに配慮し合うように創造してくだされた」と述べています。

もしも、私たちが隣人への愛や義務を傷つけたり損なったりすることなく、件の事柄から離れることができるならば、困窮を避けることや、額に汗して日々の食べ物や着る物や他の必要なものを求めることは禁止されるどころか、むしろ大いに命じられていることです。隣人を損なうことなく自分の命を守り、死から逃れられることは、なんと相応しいことでしょうか。キリストご自身がマタイによる福音書五章〔六章二五節〕で語っているように、体や命は食べ物や着る物よりも大切なのです。しかし、神を試みることなく、喜んで裸であること、飢えること、困窮することに耐えることができ、危険に留まることを望むほど信仰が強くと、その人自身それができるとういうのならば、そのようにさせなさい。そうだからといって、同じようにしない者や、同じようにできない者を軽蔑してはいけません。

死から逃れることそれ自体は不義と言えない例が聖書に十分あります。アブラハムは偉大な聖人でしたが、死を恐れて、妻のサラを妹だと騙って死から逃れました。しかし、アブラハムは隣人を傷つけたり損なったりしなかったのです、そのことは罪に数えられていません。息子のイサクが行ったことについても同様です。ヤコブもまた、殺されるのを恐れて兄エサウから逃げましたし、ダビデもサウルとアブサロムから逃げました。預言者ウリヤもヨアヒム王のもとからエジプトに逃げたのです。また、干ばつの時の預言者であったエリヤ（列王記・上一九章）も、その偉大な信仰によってバアルの預言者たちを全て殺しました。そのことでイゼベル女王が脅しをかけてきたので、エリヤは恐れて荒れ野へ逃げました。それ以前にも、モーセはエジプトの王に捕らえられる前にミディアンの地へ逃れました。その他にも多くの例があります。この人たちは皆、死から逃れるためにできることをして、自分たちの命を救ったのです。しかし、そのことで隣人から何かを奪ったわけではなく、むしろ、す



べきことをしたのです。

きつとあなたは、これらの例はベストによる死についてではなく、迫害による死についてのものだと言うでしょう。答えはこうです。死は、どのように死に向かうかは違っていても、死です。神は四つの災い、あるいは、罰を聖書で示しています。すなわち、疫病、飢餓、戦争、野獣です。もしも、神が共にいて良心を備えている人ならば、四つのうち一つか、いくつかは逃れられるでしょう。どうして四つ全てではないのでしょうか。上述の例は、どのようにして愛する聖なる父祖たちが剣から逃れたかを示しています。創世記を読めば明らかのように、アブラハム、イサク、ヤコブとその息子たちがエジプトに逃げた時、他の災い、すなわち、飢えや渴きから逃れたということです。それでは、どうして野獣からは逃れられないのでしょうか。戦争が起こったり、トルコ人が迫ってきたりした時、誰も町や村から逃げないで、神の罰として剣を受けなければならぬのでしょうか。そのようなことを私は聞いていますが、次のことは確かです。そこに留まる人は信仰が強い人です。しかし、そこから逃げる人を軽蔑してはいけません。

別の例を挙げましょう。もしも家が火事になったとして、この火もまた神の罰だということで、外に逃げ出したり、家の中に取り残されている人を助け出したりしないという人は居ないはずで、また、誰かが大水で溺れているのに、この大水は神の罰だと言って助けようとする人は居ないはずで、それがあなたに可能ならば、それを行いなさい。神を試みてはなりません。それが他の人たちに可能ならば、その人たちに任せなさい。さらに言えば、ある人が足を折ったり、怪我をしたり、刺されたりした時、まず治療しないで、「これは神の罰ですから、治療しないで治るまで耐え忍びます」と言う人は居ないはずで、冬の寒さで凍えるのも神の罰ですか。

それで死ぬこともあります。耐え忍ぶと言うのなら、どうして火に当たったり、ストーブで暖を取ったりするのですか。頑張つて暖かい季節になるまで外で凍えていなさい。この論法で言えば、病院も、薬も、医者も必要ありません。すべての病気は神の罰だからです。飢えや渴きも大きな神の罰で、殉教の証になります。どうして食べたり飲んだりして、その罰を受けようとしませんか。このような言い方をしていると、最終的に私たちは主の祈りを廃止することになってしまいます。「悪からお救いください。アーメン」という祈りを止めてしまうことになります。なぜなら、全ての悪は神の罰だからです。地獄から救い出してくださいとか、地獄を避けさせてくださいとかも祈つてはいけないことになります。それも神の罰だからです。それでは、どうなりますか。

それら全てのことから、私たちは次のことをお教えします。すなわち、私たちは可能な限り、あらゆる悪に反抗するように、また、そこから守られるように願うべきです。既に述べたように、そうやって神から離れないようにしましょう。もしも、神が私たちに悪を受けて従うようにされるならば、私たちには防ぎようがありません。それゆえ、このように考えなさい。すなわち、ある人が隣人に奉仕するために死の危険に留まることになったならば、神に委ねて言うのです。「主よ、あなたの御手の中に私は居ます。あなたは私をここに留め置かれませんでした。あなたの御心がなりますように。私は、あなたの貧しい被造物です。たとえ、私が火の中、水の中にいても、渴いていても、あるいは、その他の危険にあつても、あなたは私を生かすことも殺すこともできます。」しかし、ある人がそこを去って逃れることができる場合も、やはり、神に委ねて言うのです。「主なる神よ、私は弱く、怖いのです。それで、私は悪から逃げて、できる限り自分自身を守ろうとしています。この災いの中で、

この全ての私に迫っている悪を前にして、あなたの御手の中に私は居ます。あなたの御心がなりますように。ここで逃げて、助からないかもしれません。なぜなら、悪も災難も至るところにあるからです。悪魔は根っからの殺人者で、不眠不休で、至るところで殺人をして不幸をもたらそうとしているのです。」

同様に、私たちはどのような困窮や危険においても隣人と関わりを保たなければなりませんし、それは義務です。もしも火事に遭遇したとしたら、愛は私を救助と消火へと駆け立てます。そこに他にも消火する人が居れば、私はそこに留まることも家に帰ることもできません。誰かが水や穴に落ちた場合、そこから立ち去るのではなく、駆け寄って、できる限り助けようとしなければなりません。しかし、他にそれができる人が居るならば、私がどうするかは自由です。誰かが飢え渴いているならば、その人を見捨てるのではなく、食べさせたり飲ませたりして、危険に遭わないようにしなければなりません。そのことで、私が貧しくなったり生活が大変になったりするかもしれないとしても、そうすべきです。もしも、ある人が隣人に対して、自分の体や財産を危険に晒したり損なったりすることがない範囲内ではか助けたり寄り添ったりしようとしなければ、誰も隣人を助けることはできません。隣人を助けるということは、自ら損害、危険、損失、欠乏に追っていくことかもしれないからです。隣人の家から火事や災禍が舞い込んできて、体も財産も妻子や他のものも傷つけられる可能性があります。それでも、隣人を助けずに困窮の中に放置して逃げ出すとしたら、神の前で殺人者と見なされます。聖ヨハネは手紙の中で「兄弟を憎む者は皆、人殺しです」(「ヨハネ三章一五節」と述べ、また、「世の富を持ちながら、兄弟が必要な物に事欠くのを見て同情しない者があれば、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょう」(「一七節」と述べています。また、これは神がソドムの町に対して罪と見なされたものの一つで、預言者エ

ゼキエルを通して「お前の妹ソドムの罪はこれである。彼女とその娘たちは高慢で、食物に飽き安閑と暮らしていながら、貧しい者、乏しい者を助けようとしなかった」「エゼキエル一六章四九節」と神が語っておられることです。終わりの日に、キリストもその人たちを殺人者として呪い、「お前たちは、病気のときに、訪ねてくれなかった」「マタイ二五章四三節」と語っておられます。ですから、貧しい者や病気の者のところに行つて助けようとしないうちは裁かれることになるでしょう。貧しい者や病気の者のところから逃げ出して、その人たちを犬や豚のように放置すれば、どうなりますか。貧しい者たちから持っている物をさらに取り上げ、極めて苦しい状態に追い込むような人たちは、どうなるでしょうか。今、暴君が福音を受け入れている貧しい人たちにしていることですが、そのままにしておきなさい。彼らは裁かれるでしょう。

自宅に居ることができない市民を受け入れる多くの孤児院、養老院、病院があります。それを維持することはキリスト教的で称賛すべきものです。各々が、特に政府は、公正に憐れみをもって施し、助けるべきです。しかし、そのような施設が無い場所では、そういう場所がわずかながらあるのですが、神の祝福や恵みを失う危機にある人たちに対して、私たちが病院長や看護師にならなくてはいけません。というのも、「隣人を自分のように愛しなさい」「マタイ二二章三九節」という神の言葉と戒めがあるからです。また、マタイ七章には「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」「一二節」とあります。

今や死が差し迫っているところでは、私たちは留まって、特に、（上で述べたように）そこから逃げず、もう互いに見捨てないと互いに団結して、準備を整えて互いに勇気づけるべきです。まず私たちは、それが私たちに与えられた神の罰であると考えますが、ただ罪に対する罰だというだけでなく、私たちの信仰と愛とに対する

試練でもあるのです。信仰については私たちが神に対して自分自身どのようにありたいのか、私たちがそこに何を見て何を経験するのかということであり、愛については私たちが隣人に対して自分自身どのようにありたいか、私たちはそこに何を見るのかということです。私はベストが悪い霊によって人々にもたらされていることを知っています。他の伝染病も同様ですが、悪い霊が空気を毒し、何か悪い息を吹き込み、それによって死にいたる毒が体に注がれてしまうのです。それでもなお、神の御心であり罰であるので、私たちは忍耐して従い、隣人に奉仕すべきです。それゆえ、危険の中に私たちの命を置くことについて聖ヨハネは「キリストは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです」(1ヨハネ三章一六節)と語って教えています。

しかし、病気のために上述のような信仰と思考とが誰かを苦しめているならば、その人を勇気づけ、それは悪魔の仕業で、そのような恐れや恐怖、脅威を引き起こすのは疑いなく悪魔であると励まして慰めるべきです。陰湿で悪辣な悪魔は、絶えず死に至るように追い込もうとするだけでなく、死は最悪のもので安息も平和も無いと私たちに恐怖を与え、私たちに絶望の空気を送り込みます。そうやって悪魔は卑劣な策を講じて、私たちが神を疑い、死について考えることも死への備えをすることもしないように仕向けるのです。それゆえ、私たちは厚い雲に覆われて自分自身の光と命とを忘れて見失い、困窮する隣人を見捨て、神と人とに対して罪を犯します。これが悪魔の考えと送り込んでくる空気です。しかし、私たちは、このような恐怖や脅威は悪魔の道化であることを知っています。ですから、私たちは互いにそれに対抗して、できるだけ受け取らないようにすべきです。勇気をもって悪魔の試みに対抗し、悪魔にとって脅威となるように私たちは賢くありましょう。そして、私たちは武

装して次のように言います。

「悪魔よ、お前の脅威を持って去れ。なぜなら、それは自分自身を悩ませるからだ。私はお前のところではなく、私の病気の隣人のもとへ速やかに向かう。その隣人を助けるために。お前には目もくれないが、私は二つの点でお前に抗う。一つは、私のこの働きは神と全ての天使たちとの御心に適い、私の行いは神の意志と正しい礼拝と従順とにおいてなされることを私は知っている。そして、このことが特にお前の気に入らないことで、私がしようとすることにお前は激しく反抗しているが、それが神を喜ばせることになるのだ。私は自ら望んで、喜んでそれをしよう。ただ一人の天使を喜ばせるだけだとしても、その天使が私を見守り、私の兄弟がそれを喜んでくれるならば。しかし実は、それは私の主イエス・キリストと天の全ての軍勢を喜ばせることであり、私の父なる神の意志であり、命令なのだ。お前の脅威が私をどうにかできるものか。天の喜びと主の御心を妨げ、お前と地獄にいる仲間たちを喜ばせ、私を笑いものにするか。お前が私を殺さずとも、お前には何もできないのだ。キリストは私のためにご自分の血を流し、私のために死んでくださったのではないか。どうして私もまたキリストのために私自身を小さな危険に晒して力ないペストに立ち向かわないことがあるのか。もし、お前が私を脅かすならば、キリストは私を強めてくださる。お前が私を殺すならば、キリストは私に命を与えてくださる。お前が毒を持っていても、キリストはもつとはるかに良い薬を持っている。いまいましい悪魔、お前が偽りの脅しで私の弱い体に何かすること以上に、私の愛するキリストが戒めと祝福とでもって私の魂にあらゆる慰めをお与えにならないならば、つまり、それは神の御

心ではないということなのだ。悪魔よ、私から去れ。ここにキリストはおられる。私はこの働きにおいてキリストの僕であり、この働きはキリストが続べておられる。アーメン。」

悪魔に抗うもう一つのこととは、困窮に陥っている全ての人たちを慰める神の確かな約束です。詩編四一編にこう書いてあります。「いかに幸いなことでしよう、困窮を自ら引き受ける人は。災いのふりかかるとき、主はその人を救ってくださいます。主は、その人を守って命を得させ、この地上で幸せにしてくださいます。敵に引き渡すことはありません。主は、その人が病の床にあるとき、立ち直らせてくださいます」と。これは主なる神の力ある約束ではないでしょうか。困窮に陥る人たちを豊かに守るといふ約束です。何か、この神の偉大な慰めに對抗したり脅かしたりするものが、いや、あるでしょうか。確かに、私たちが困窮する人たちに奉仕する際にできることは、この神の約束と恵みとに比べれば、小さなことでしかありません。このことは聖パウロがテモテに宛てて「信心は、この世と来るべき世での命を約束するので、すべての点で益となります」と述べている通りです。信心とは礼拝に他なりません。礼拝とは、もちろん、隣人に奉仕することです。愛と、信心深さと、真剣さとをもって病人に奉仕する人たちが、多くの場合、守られるということとは、経験上も当てはまります。病気に感染しても、損害を被りません。詩編〔四一編〕にも「病の床にあるとき、立ち直らせてくださいます」と書いてある通りです。すなわち、神は病の床を健康な寢床に変えてくださるのです。しかし、貪欲で遺産目的に病人の世話をしたり、自分のしたことで利益を得ようとしたりする人が、ついに自分が感染してしまって、財産や遺産を手に入れる前に死んでしまったとしても、何も不思議なことはありません。

この慰めに満ちた神の約束を実践する人は、たとえ、その人が報酬を受け取っていたとしても、というのも「働く者が報酬を受けるのは当然だ」〔ルカ一〇章七節〕と確かに書いてありますし、今度は自分自身が助けてもらえるという大きな慰めを持っています。神ご自身がその人を看病し、その人の医者になってくださいます。ああ、神が看護師とは。ああ、神が医者とは。どんな医者、薬剤師、看護師よりも、神ご自身がそうであることの素晴らしさ。このことは、病人のもとへ行つて奉仕する勇気を与えないでしょうか。たとえ、その病人がペストに罹患していて体中に髪の毛の数ほどの発疹があり、さらに一〇〇人にペストを感染させるほどであったとしても。こういう状況で、あなたの看護師、医者になると約束してください。あなたに比べれば、ペストや悪魔など何ほどのものでしょうか。もう、ああ、本当にもう、恥を知らなさい。いまましい不信仰。こんなにも豊かな慰めを軽んじています。こんなにも確かに信頼できる神の約束に強められるどころか、ごく小さな発疹や不確かな危険に脅かされているのです。世界の全ての医者が集まって、あなたを看病してくれたとしても、そこに神が不在ならば、何の助けがありますか。逆に、世界の全てがあなたを見捨てて、あなたを看病する医者も誰もいないとしても、この約束の通り神があなたと共にいてくださるならば、何の損失がありますか。あなたがペストを克服できるように、何千もの天使たちがあなたの周りにいて見守っていることに、あなたは気づかないのですか。詩編九一編には「主はあなたのために、御使いに命じて、あなたの道のどこにおいても守らせてくださる。彼らはあなたをその手にのせて運び、足が石に当たらないように守る。あなたは獅子と毒蛇を踏みにじり、獅子の子と大蛇を踏んで行く」とあります。

ですから、愛する友たち、そんな弱気にならないで、私たちが看病する責任のある人たちから離れないように



しましょう。悪魔のせいそんな恥すべき逃避をして、その人たちを見捨てないようにしましょう。そのことで悪魔は私たちについて喜びや楽しみを得るかもしれませんが、神は疑いなくそれを望まず、快くも思わず、全ての天使たちを集めてくださいます。というのも、やはり次のことは確かだからです。神のこの豊かな約束と戒めを蔑ろにし、困窮の中に隣人を置き去りにする者は、全ての神の戒めを破ることになり、見捨てた隣人に対しては殺人者であると思なされてしまいます。そうなると、神の約束が翻って、無慈悲な脅しに変わってしまいます。（それを私は心配しています。）それゆえ、あの詩編「四一編」の言葉もそういう人たちに対しては裏返しになるのです。「いかに不幸なことでしょう。困窮を自ら引き受けない人は。災いのふりかかるとき、主はその人を救ってくださいさらない。主は、その人を守って命を得させ、この地上で幸せにしてくださいさらない。敵に引き渡してしまう。主は、その人が病の床にあるとき、立ち直らせてくださることもない」と。「というのも、私たちは自分が量るものによって自分自身も量られるからです」〔マタイ七章二節〕。それしかありません。しかし、このことは聞くだけでも恐ろしく、起こりうるかもしれないとなれば、さらに恐ろしく、経験することになれば、これ以上に恐ろしいことはありません。神が御手を離して去ったならば、そこはどうなりますか。代わって虚しい悪魔と全ての悪いものがやってくるのです。神の言葉と戒めとに反して隣人を見捨てたならば、もはや、他に何もありません。各々が正直にそのことを悔い改めない限り、確かにそのことは起こります。

もしも、キリストご自身か、あるいは、その母が病気になることしたら、誰もが熱心に奉仕して助けようと望むはずだと私は思います。誰もが大胆に勇気を出して、助けたいと望み、逃げ出すどころか、駆け寄っていくでしょう。しかし、キリストご自身が「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてく

れたことなのである」と語っておられることを、皆は聞いていないのです。そして、キリストは第一の戒めを告げる時に、「第二も、これと同じように重要である。隣人を自分のように愛しなさい」とも告げておられます。

あなたは、隣人愛の戒めが第一の神への愛の戒めと同じであることを聞いているのですから、あなたが隣人へ何かを行うか否かは、神に対して行うか否かと同じなのです。あなたがキリストに奉仕し、キリストのために働きたいと望むならば、ほら、あなたの目の前に病気の隣人が居るのですから、その人に駆け寄って奉仕しなさい。

そうすれば、あなたはその隣人にはつきりとキリストを見出すでしょう。その人がキリストだということではなく、その人の言葉の中にキリストがおられます。しかし、あなたが隣人に奉仕したくないし、そのつもりもないと言うのなら、キリストはそこにおられるわけですから、あなたが去れば、キリストを置いていくことになると思います。もしもキリストがそこにおられたならば喜んでキリストに奉仕したろうになどという、あなたにとって何の役にも立たない虚しい偽りの考えはしないでください。体でもってキリストに奉仕する者は確かに隣人にも奉仕することになるといえるのは、虚しい嘘です。このことは、悪魔が私たちに直面させる脅威とその脅威から逃げ出すことに対抗するための戒めと励ましとして読んでください。神の言葉と戒めとに反して隣人を見て、左手に多くの罪を犯させないようにするためです。

しかしながら、中には大胆不敵にも右手で多くの罪を犯している人たちがいます。というのは、その人たちは医者にかかろうとせず、ペストを罹患している人やペストが蔓延している場所を避けようともせず、あえて死やペストに近づいて神を試みているのです。患者と飲んだり遊んだりして、そうやって自分の勇気を見せようとして、「これが神の罰だとすれば、神が私たちを守りたいとお望みなら、どんな医者も私たち自身の努力も必

要なしに、良くしてくださいるでしょう」と言っています。こういうのは神への信頼ではなく、神を試みることで、神が医療というものを造りになり、私たちが健康に生きるために体調を管理して労わる理性をお与えになったのです。そんなもの必要ないという人は、持っているものを傷つけている隣人に用いず、自分自身の体も蔑ろにし、神の前で自らを殺すことになってしまいます。また、ある人たちは、食べ物や飲み物、衣服や避難所を侮り、信仰において大胆に「神が飢えや寒さから守ってくださいることをお望みならば、食事や衣服が無くても、そのようになる」と言っています。そういう人は、自ら死ににいつているようなものです。さらに酷いのは、そうやって自分の体を蔑ろにし、ペストに対して何の防衛もしないで、他の多くの人たちに無用の負担をかけ、そして感染させてしまうことです。その人ひとりの体のことであれば、それはその人の責任ですが、隣人の死に対しても責任があるならば、それは神の前で何度も殺人をしていることになります。こういう人は、町で一軒の家が火事になると、「神がお望みならば、水や消火活動なしにちゃんと町を守ってくださいるだろう」と言って、町全体が燃え尽きるまで放置するような人です。

私の愛する友たち、そうではないのです。そんなことがあってはなりません。医療に頼り、助かるために必要のことは何でもしなさい。家や庭、通りを燻しなさい。不要不急の外出を避け、人に会うのも避けなさい。通常の火事の消火を手伝う人のようにしていなさい。ペストも木材や藁の代わりに体や命を燃やす火事のようなものだからです。それで、次のように考えなさい。「このように、敵が神のご計画によって毒と死に至る糞尿を私たちに撒き散らしています。ですから、私は神が私たちに恵み深くあるようにと祈ります。それから、空気を浄化するために燻し、医療に頼り、必要の無い場所や人との接触を避け、私自身を蔑ろにせず、私のせいで多くの人

たちを感染させないように、私の不注意で隣人を死なせないようにしたいと思います。そのために神が私を召さうとなさるならば、神が私に賜ったなすべきことを私はやりましたし、私自身の死に対しても、他の多くの人たちに対しても、私に責任が無いことを、神は確かに見出すでしょう。しかし、隣人が私を必要としているならば、人も場所も避けることなく、すでに述べた通り、進んでそこへ行き、助けます」と。さあ、これが真に神を畏れる者の信仰です。愚かな行いでも、思慮のないことでも、神を試みることもありません。

ペストに罹患して回復した者も、人々を避け、必要が無ければ会おうとはしません。その人に助けが必要なら共に居るべきであるし、見捨ててはいけません。危険から脱したならば、その人が他の誰かに無用の危険を与え、死なないようにすべきです。知恵ある者は「危険を好む者は、それによって身を滅ぼす」（シラ書三章二六節）と語っています。それゆえ、ある町の人々が、隣人が危機にある場合は信仰において大胆であり、そうでない時は注意深く、互いに配慮し合って、その毒に対して助け合うならば、死者は少なくて済むでしょう。しかし、一部の人が怖がりすぎて、危機にある隣人から逃げ出してしまったり、他の人たちが向こうみずで、隣人を助けるどころか危機を拡大させてしまったりすれば、悪魔はそれを好機とし、死者が増えることになります。前者は恐れのために、後者は神を試みることで、どちらにせよ、神と人にとって有害です。悪魔は逃げ出す者に狙いを定め、留まる者を捕らえるので、誰も逃げられません。

ある人たちは、さらに悪く、ペストに罹患していることを隠して人々の間に出ていきます。その人たちは、ペストを撒き散らして他の人に感染させると、自分たちはペストから解放されて治ると信じているのです。この考え方で通りや家の中を歩き回り、ペストを他の人やその子どもたち、使用人たちに感染させて、自分が助かるう

とします。悪魔がこのようなことを信じさせたり、実際に起こるのではないかとの思い込みを、さらに強めたりします。また、これも言っておきますが、ある人は自分だけペストになったことがおかしいという思いで、人々に間に出ていき、他人の家に入ります。まだそこにペストが届いていないのが悔しくて、そこにペストを持っていくのです。まるで虱を誰かの服に付けたり、蠅を部屋に入れたりするように、このような軽はずみなことをしています。こんなことが本当にあるのかどうか、私にはわかりません。もしも事実ならば、私たちドイツ人は人間でしょうか、それとも、悪魔でしょうか。確かに、度を越して悪い人たちもいますが、そういう人たちは悪魔で間違いないでしょう。私の助言としては、そのような人を見つけたら、判事に任せて、紛れもない真の殺人者、極悪人として処刑人に引き渡せということです。まさに、そのような人たちは町の暗殺者では無いでしょうか。暗殺者と同じで、誰がやったかわからないように、そこかしこで人にナイフを突き刺します。そうやって、ここでは子どもに、そこでは女性に、誰にもわからないようにペストに感染させ、何か良いことをしたかのよう

に笑って去っていきます。このような殺人者と共に住むよりは、わかっている分、野獣と共に住む方がましです。この殺人者たちにどう説教すれば良いか私にはわかりません。聞かないからです。私は政府にこの人たちを見張るように要求します。医者としてではなく、処刑人として振る舞うように助言します。神ご自身も旧約〔レビ記一三章一四節〕において、重い皮ふ病になった者は共同体から離れ、その拡大を防ぐために町の外に住むように命じておられます。私たちは、この危険な感染状況では、なおのことそうすべきです。罹患した人は、すみやかに人々から離れるか、あるいは、隔離され、すぐ医療の助けを求めなさい。そして、すでに十分に私が述べた通り、その人を見捨てずに助けるべきです。それが感染の拡大を早く察知し、その人だけではなく、共同体

全体の益となります。そうすることで感染を抑え、人々の間で拡大させないようにします。ヴィンテンベルクにおいては、今まだペストは発生源に出ているだけです。ありがたいことに、まだ空気は清浄です。しかし、向こうみずの人や怠慢な人が一部おり、少しだけ感染しています。悪魔が脅かしをかけて私たちが逃げ出すようにしかけることを楽しんでいるようですが、神が悪魔を抑えてくださるでしょう。アーメン。

これが、死から逃れることについての私たちの理解と意見です。あなたがたに何か他の考えがあれば、神がそれを示してくださいませ。アーメン。

## 二 書簡追記

この手紙を出版するに際し、内容を読み返してみました。どのように魂に配慮し、このような死が迫る状況において振る舞うべきかについて、短い実践例を付すのが良いと私は思いました。すなわち、私たちは非常に多くのことを求められていて、日々、口頭で政府に対して、また役所に対しても十分に行っていることです。第一には、教会へ行って説教を聴き、いかに生きて死ぬかについて神の言葉から学ぶように、民衆に呼びかけるべきです。そこで、自分が粗野で必要な対策を取らずに、また、神の言葉を蔑ろにして病気の人を放置して生活していかないか、注意すべきです。そうすることで、真剣に、涙と嘆きをもって痛悔と改悛を自覚するでしょう。異教徒や獣のように生きている人、まだ公的な悔い改めをしていない人にまで、私たちはサクラメントが届くと思っ

ていませんし、その人たちは、まだキリスト者に数えられていません。その人たちは、自分たちが生きたいように生きて死にたいのです。私たちは豚に真珠を飾ったり、犬に聖なるものを与えたりすべきではありません。残念ながら、荒っぽくて粗悪な人たちがたくさんいます。その人たちは生きていても魂を手放しているのです、死んでいるのです。魂を使い物にならない丸太のように、どこかへ持って行って捨ててしまったのでしょうか。そこには感性も理性もありません。

第二に、ある人たちは罪の告白をして、隣人と和解し、週に一回か二週間に一回サクラメントを受け、神の約束を信じて、牧師やチャプレンが到着する前に神が自分を召されるか、あるいは間に合うかどうかと思いつながら、死への備えをします。こういう人も自分の魂を手放していますが、損なっているのではなく、神の戒めに従っているのです。多くの人が死んでいく中で、ただ二人か三人しか牧会者が居ないところでは、全ての人のところに行くことができませんから、死に際してキリスト者が知っておくべきことを全てその時に伝えることができないう可能性ももちろんあります。まさに死に瀕している人が居て、誰か自分のもとへ来て説教したりサクラメントを与えたりできるだろうと算段するのは、その人の罪です。なぜなら、その人は、神が呼び集め、求めておられる公の説教やサクラメントを軽視しているからです。

第三に、もしも牧師やチャプレンを病人のもとへ送りたいと望むならば、発症した段階か初期の段階、すなわち、病人がまだしっかり感性や理性を保っていて、病気が進行してしまいう前に呼ぶべきです。このことを私が言うのは、魂が口から出ていきそうになるまで、あるいは、病気の進行で言葉が話せなくなったり理性がほとんど無くなったたりしてしまうまで、牧師を呼ばない怠惰な人たちがいるからです。そうなる前から、その人たち

は「愛する主よ、牧師に最善のことをお教えください」とかなんとか嘆願するのですが、その前には、病氣だと分かる前には、牧師が自分のもとへ来るようにとは願いません。むしろ、「はあ、そんなに危険でしょうか。状況は良くなるでしょう」などと言います。熱心な牧師たちは、こういう人たちに何をすれば良いのでしょうか。

それでも、この人たちの体と魂とに配慮すべきですか。獣のように生きて死んでいく人たちです。この人たちは死ぬ直前に福音を語ってサクラメントを与えるべきだと言いますが、教皇派の人たちと同じように、信仰があるかとか、福音を知っているかとか、誰も問いません。ただ、一つのパンの塊がその人の喉の奥へ流れ込むだけです。それゆえ、すべきではないのです。話すこともできず、福音とサクラメントとを信じ、理解し、望んでいることを表明することもできない人に対して（特に、以前は軽率で怠惰であった場合）、私たちは何も与えたくないと思います。なぜなら、私たちは不信仰な人々にはサクラメントを与えないように命令されており、信じて告白する人たちにサクラメントを与えるように命令されているからです。不信仰な人々が危険に陥るのは私たちの責任ではありません。私たちは繰り返し説教し、教え、戒め、慰め、訪ねてきました。私たちの教会や奉仕が行われていない場所においてもそれらを行ってきました。

以上が、私たちの経験からの短い実践例です。ヴロツワフのあなたがたのために書いたというわけではありません。私たちがこうしなさいと言わなくても、キリストがあなたがたと共に居てください、あなたがたに必要なことを全て、聖なる油を豊かに注いで、あなたがたに与えてくださいます。誉れと栄光が父なる神と聖霊と共にキリストに永遠にありますように。アーメン。



### 三 墓地についての追記

この死についての手紙を書いた時に私は述べる事ができなかつたのですが、埋葬についても述べておかなければなりません。まず、私は医者たちや全ての上役たちに墓地が町中にあつても危険は無いのか判断してもらいました。というのも、私は墓から立ち上る蒸気や霧が空気を汚染するのかどうか分からず、そういうことを何も理解していないからです。もしも、ちゃんとした判断が出されたら、町の外に墓地を設置することになるかもしれません。すでに述べたように、とにかく私たちには病毒を抑え込む責任があるからです。神は、私たちが危険に陥らないように、私たちに自分自身の体を労り、面倒を見て、世話をするようにと命じておられます。神は、私たちを危険の中で慰めたり、あえて危険の中に置かれたりすることもありますが、そのことで私たちが生きるか死ぬかは神の御心によるのです。聖パウロはローマの信徒への手紙一五章で「わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません」(一四章七節)と述べています。

ユダヤ人においても異邦人においても、聖人においても罪人においても、町の外に墓地を設置することは古い慣習にあることを私は知っています。彼らには私たちが見習うべき聡明さがあります。聖ルカによる福音書においても、寡婦の息子をキリストがナインの門で生き返えさせたことが記されています。(本文には「ちようど、棺が担ぎ出されるところだった。町の人が大勢そばに付き添っていた」(七章一二節)とあります。)この地方で

は町の外に棺を埋葬していたことが分かります。

また、キリストご自身も町の外に墓が用意されましたし、アブラハムも同様で、エフロンの畑の端にある洞穴を自分の墓として購入し、族長たちをその場所に葬らせました。さらに、ラテン語の *sepulchrum* は「運び出す」という意味ですが、この言葉を私たちは「埋葬する」という意味で使っています。ローマ人たちは、空気を清浄に保つため、単に遺体を運び出すだけではなく、火葬して全て灰にしていました。

私の助言は、こうです。このような例に倣って、町の外に埋葬するのが良いでしょう。私たちのヴィッテンベルクについても町の中に墓地がありますが、ただ必要性に駆られてという以上に、祈る環境を整える点でも町の外に公共墓地がある方が良く考えています。

というのも、墓地は静かで良い場所にあるべきで、人々が黙想し、死者を思い起こし、終末における復活のことを考えて祈る場所であるべきです。つまり、聖なる場所になれば良いと思うのです。そこに聖人たちが眠っていると疑わず、畏れをもって足を運ぶ場所です。さらに、祈りに相応しい絵や肖像画が壁に描かれていても良いでしょう。

しかし、私たちの墓地はどうでしょうか。本当に町の中にあり、四、五本の道が通っていて、二、三の市場があり、忙しなく、静けさはありません。毎日、もう昼も夜も人々が行き交っています。人や動物が家から出入りしては墓地を通ります。もはや墓地とは言えません。ですから、祈るとか、墓に参るとか、そんなことは誰にも思いもよらないことです。私たちが、聖人たちが眠る場所で死者の復活について考えて、祈ろうとしても、みんな通路だと思っていて、通る時に死者を思い起こすことなどありません。どうすれば、人々が行き交かう公共

の場所で、それが可能でしょうか。やはり、私は墓地をエルベ川のほとりか、森の中に設置したいと考えています。もしも墓地を誰も通行しないような本場に静かな場所に設置したら、霊的で聖なる場所になり、死者に参ることができて、祈る場所として相応しくなるはずですよ。これが私の助言です。望むならば、そうしてください。誰かがより良いことを知っているならば、その方が良いでしょう。私は誰の主人でもありません。

#### 四 書簡あとがき

最後に、私たちから注意とお願いがあなたにがあります。キリストによって、私たちのために神に祈ってください。孤独なサタンがもたらす、まさに霊的なベストに対して神が教え、私たちの戦いを助けてくださるようですよ。そうやって、特に、サクラメントを冒涇することで、サタンは世界に毒をばら撒こうとしています。これについては、分派の連中も同じことをしているので、サタンは猛々しくキリストの目を我がものにした気になっています。それで、身の毛がよだつことですが、サタンは子どもみたいに勝ち誇って私たちから救い主イエス・キリストを奪い取ろうとしているのです。教皇制のもとでは、ちょうど修道士が被るフード付きのローブが聖なるものとされていたように、サタンは肉に対して攻撃していましたが、今や、サタンは霊に対して攻撃しようとしています。キリストの体と言葉とを無意味なものにしようとしているのです。彼らは私の小冊子に対しての回答をずいぶん前に送ったと言うのですが、驚くことに今日までヴィッテンベルクにはまだ届いていません。私

は、神の御心ならば、もう一度また彼らに返事をして議論を進めたいと思っています。ただ、彼らは以前よりも邪悪になっているようです。彼らは、カメムシみたいに、自らの悪さのために悪臭を放っています。しかし、カメムシは潰そうとすると余計に悪臭がひどくなります。私の書いた小冊子が、彼らの大きく開いた口から誉むべき神が守ってくださる人たちを助け出し、さらに、真理のうちに強め、信仰を堅くするのに十分な内容になっていることを願っています。私たちの救い主である主キリストが真の信仰と熱烈な愛とにおいてあなたがた皆を守り、終わりの日まで汚れのないように私たち皆を守ってくださるように。アーメン。

貧しい罪人である私のために祈ってください。

## 解題

この著作（いわゆる、ルターのペスト書簡）は、もともと書簡であるため表題は無く、ただ「敬愛するヴロツワフの牧師ヨーハン・ヘス博士、ならびにキリストの福音に仕える同僚たちへ」という宛名が冒頭に書かれているだけであるが、出版する際に『人は死から逃れることができるのかどうかについて』という表題が付けられ

た。これはルター自身が付けたものなのかどうかはつきりしないが、今回の翻訳に際して底本としたワイマール版の註釈には「おそらくルターの手によるものではない」と記されている。ただし、ヴィッテンベルクにおいてルターの主要な著作の多くを出版していたハンス・ルフト印刷工房で出版された複数の版で『人は死から逃れることができるのかどうかについて』と表題が付けられていることから、おそらくルターもこの表題で出版されることを認識していたと考えることができる。一五二五年にヴロツワフでペストが大流行した際に、当地の福音主義教会の説教者であったヨーハン・ヘスから「キリスト者が死に瀕する状況から逃れるのは相応しいことかどうか」について尋ねられたことに對する返事としてルターが書いた書簡を出版したもので、この表題はヘスの質問を受けて付けられていると推察する。

ルターは聖書から自由に引用する場合があります、必ずしも聖書本文そのままというわけではないが、この翻訳においては基本的に新共同訳を用いている。新共同訳の章節は「」内に記してある。ただし、新共同訳をそのまま用いるとルターの原文の意味に合わなくなる場合は、ルターの引用を翻訳した。

構成は、一 書簡本文、二 書簡追記、三 墓地についての追記、四 書簡あとがきとなっているが、もともとこの書簡は一の本文と四のあとがきのみであった。二と三の追記は出版に際して付加されたものである。なお、一〜四の構成の標示は訳者によるもので、定本には記されていない。

内容に対する考察は他の方々の論文に譲るが、この著作は五〇〇年前前のドイツで書かれたものであり、現代の日本に生きる我々からすれば判断が難しい言い回しや過激な表現も目に付く。しかし、この短い書簡の中には、単に疫病の流行に對する対応だけでなく、ルターの神学的な考えが凝縮されているようである。我々が現代の予

断をもってルターに幻想を抱くのではなく、むしろ、当時の状況やルターの奥行きや広がり、あるいは、その限界をありのままに受け止めることができるようにとの意図で、そのまま翻訳している。